

---

# おれたちバーチャルボーイズ！

法螺 吹介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おれたちバーチャルボーイズ！

### 【Nコード】

N8129Y

### 【作者名】

法螺 吹介

### 【あらすじ】

『赤い光を見てから記憶がない』と証言する通り魔事件容疑者のニユースを見たジツオ少年は、とんでも行動を繰り返す愉快な小学六年生！ 天真爛漫な同級生の友達イーコに小馬鹿にされたり、頭脳明晰なシュタインに説教されたりするお茶目さんだ。

放課後ゲームセンターから意気揚々と帰宅すると、見知らぬ叔父さんチユウタ氏がお客さんとして来ていた。ジツオはチユウタ氏の誘いが断れず、彼持参のテレビゲームをする。しかしそのゲーム機は常識では考えられないクレイジーなシロモノだった！

ゲーム機秘密、叔父さんの正体……謎が謎を呼ぶ展開に翻弄されるジツオの運命やいかに！

## 赤い光にご用心

—

(……… 続いているニュースです。仮想県仮定市で男が刃物を持って暴れるというニュースが入っています。目撃者に拠りますと、男は突然奇声をあげ、鞆に忍ばせていたナイフを持って周囲を威嚇、通行人を切りつけようと暴れましたが、通りがかった無職の男によって取り押さえられ、その後通報によって駆けつけた警官が傷害未遂の疑いで逮捕したとのことです。容疑者は『突然赤い光が見えて、気がついたら取り押さえられていた』と話している模様です。この事件により容疑者を取り押さえた無職の男が、容疑者に切りつけられ軽傷を負っています……)

「赤い光赤い光…… 馬鹿は高いところが好き、狂人は赤い光が好きってね。それにどうよ？ せっかく取り押さえて怪我までして、無職無職ってそりゃないよ。そりゃ無職なんだろうけどね、そつとしいてやるつよ」

「ジツオ！ なにテレビと話してるの、あなた学校行かないとだめな時間じゃない？ そんなだとあなたが無職になるわよ」とジツオの母はシSTEMキッチンの方こう側から言った。

「大丈夫、こちらら伊達に六年まで登りつめたわけじゃないよ。登校にかかる時間も心得てる」とジツオ ヒゲンジツオ フルネームは日源実男

は言った。

ジツオの母はジツオのトーストが一枚まるまる残っているのを見て「まだ食べてないの？ 早く食べなさい」と言った。

ジツオはなにも理由もなくトーストを食べ残しているわけじゃない。トーストをくわえて角を曲がれば、美人でおてんばな転校生とぶつかる確率があがると思ったからだ。もちろん本心から信じているわけではないが、始業式の今日は絶好のチャンス。ジツオはなにことも試してみなければ気がすまないタイプなのだ。

しかしジツオは空気も読む。ランドセルを拾い上げ、「じゃ、行ってきます」と言ってからトーストをくわえ、学校へ向かった。

始業式前のホームルームが終わってから「ジツオ、おひさ。学校来的时候パン食べてたでしょ？」ときいたのはジツオの同級生、吉田良子シタヨシコで彼女のあだ名はイーコだった。

「食べてたよ、それがどうかしたかい？」

「なんで？」

「理由なんかない、そんなこと忘れてくれ」

「転校生とぶつかりたかつたんでしょ？」

「……へー、おもしろいね。それいただいた。転校生とぶつかりたかつた、柵の向こう側の女子と知り合いたかつたんだ」

「はあ？ 意味わかんない、変なやつ」と言つてイーコはジツオに軽蔑した眼差しを向けたあと、「ミキちゃんそれでさー」と甲高い声を出してミキちゃんのもとへ戻つていった。

ジツオはたった一人の友達といつて過言ではない相原秀太アイハラシュウタことシユタイン 五年のとき学級委員長をしていて秀太委員長、それにアインシユタインをもじつてついたあだ名 のところにいった。

「シユタイン、ひさしぶ。なんか変わったことあつた？」

「おお、ジツオ。なんもないよ。いつもと同じ。塾マダばっかだね」

「大変だねー、中学受験だつて？ ご苦労なこつて」

「おまえは受けないの？」

「おれは受ける気ないね」

「受けとけばあとはエスカレーター式で楽できるのに」

「人生山あり谷あり、樂することばかり考えていてはいかんだよ」「そりゃそつだよ。だからさ、いま頑張るかあとで頑張るかって話だろ。それにさ、たぶん人生つてずっと頑張りつぱなしだぜ、できるやつはな」とシユタインは目をぎらつかせながら言った。

「うん、そつだね。シユタイン、きみは正しいよ。でき、今日学校終わったら遊びにいかない？」

「おう、いいよ。なにすんの？」  
「とりあえずゲーセンにでもいこうぜ」

UFOキャッチャー、プリクラ、テレビゲーム、エアホッケー、パチンコ、メダルゲームのロットなどいろいろなゲームがある。そしていろいろな人がゲームで遊んでいる。子どもやゲームのほかに、退職後のお年寄り、サラリーマン風のおじさん、主婦らしきおばさんもいる。

ジツオはそれを見て「子どもにはゲームするなって言うくせに自分たちはするんだな、これ。そもそもゲームって子どものものなんじゃないの？」とちょっとした口癖を言った。

「大人も大して変わんないってことだね。まあおれたちが言えることなんてないよ。おれたちはおれたちで遊べばいいだけさ」

シユタインはわかった口を利いてはみたものの、ゲームセンターに来る大人たちを見ると、なんとも言えない気分になるのだった。ゲームはただの暇つぶし。そう心から言える大人のほうがいい気もするし、ゲームを心から楽しめる大人のほうがいい気もする。

入ったばかりのゲームを見て「シユタイン！ これおもしろそうだぜ！」と目を輝かせるジツオを見ると、楽しんだほうがいいに決まってるじゃん、とシユタインは思った。

ジツオとシユタインは日が暮れるまでゲームセンターで遊んで、家に帰った。

「ただいま」と言ってジツオが扉を開けると、玄関に見慣れない靴がある。誰が来ているのか知らないけどなるべく関わりたくないなでも挨拶ぐらいはしないとあとで父か母、もしくは両方に文句を言われるかと思ったので、ランドセルを部屋に放り投げてリビングに向かった。

ソファにジツオの父と母、細いジツオの父みたいな人が座っていた。ジツオは「どうも」と細いほうに会釈した。その人は「ジツオ

くん、おかえり」と言った。彼の足元に大きな飴色のトランクがあるのにジツオは気づいた。

ジツオの父は「おまえの叔父さんだよ。懐古忠太、カイコチュウタ チュウタおじさんだ」と説明した。

「おまえ遊んでもらったことがあるんだぞ。憶えてるか？ おまえはまだおしめをしていたがな、はっはっは……」

ジツオの母は「まあ、あなたいやだ、おほほほ」と言った。

「はは、兄さんはいつもおもしろいこと言うね」

頃合をみて「どうも、遊んでもらったようで、ありがとうございます」とジツオが真顔で言うと、笑っていたみんなが静まり返った。「父親譲りだ」とチュウタ氏が言うと、ジツオの父と母はなにがそんなにおもしろかったのかわからないが、大笑いした。

「ジツオくん、ゲームでもしない？」とチュウタ氏はジツオを誘った。

「叔父さん、なんのゲームをするんですか？」

「テレビゲームだよ」

大人になってもまだテレビゲームか、おっさんとテレビゲームなんてしたくないけどつきやってやるか、とジツオは思っ、「一応新しいやつ揃ってると思います」と言った。

「持ってきたのがあるから、それで遊ぼう」と言ってチュウタ氏は飴色のトランクを二度叩いた。指に絆創膏が巻いてあるのに気づいた。重症だな、とジツオは思った。

ジツオは自分の部屋にチュウタ氏を案内し、部屋に入るとなぜだかいつもと違うような心地がした。ドアがゆっくりと閉まる音を聞くのと、いつもより静かな気がするなと思った。

直後によくわからない力によって世界が波打ち、ぐるぐると回転、目に見えていたものがきれいさっぱり消え去り、どこまでも続く真っ白な空間にジツオとチュウタ氏は取り残された。

ジツオが驚いて言葉を失っていると、チュウタ氏が「大丈夫。元の世界には絶対に戻れるから」と声をかけた。  
「落ち着いて。……さあ、ゲームを始めよう」

チュウタ氏は銚色のトランクを地面に置き、開いた。なかには赤い双眼鏡と三脚、ゲームのコントローラーが二組あるようで、チュウタ氏はそれを組み上げ始めた。

ジツオは自分はないかの間違いで死んでしまったのかと思ったが、これはどちらかといえば、死んでいるというより夢を見ているというほうが近い気がする、というより、夢のほうがいいな、と思った。仮に死んでいるとしても、この世界が続いていくとしたら、この世界なりに生きていかないと。ああ！でもこんな真つ白な世界は退屈で死にそうだ！一度死んだ人間が二度死ぬことなど……。

「ジツオくん、聞いてるかい？」

「え？」

「聞いてくれ。なにから話せばいいか、どう説明したらわかってもらえるか自信はないけど、ぼくは真実のみを話す」

よりによつてよく知らない叔父さんだけはいるんだよな、とジツオは思った。最悪。

「アズ・ユー・ライク」とジツオはつぶやいた。

「ジツオくん！」

チュウタ氏はジツオを引っぱたこうと手を振り上げたが、ジツオが身を仰け反らせて「はいはい、わかりましたよわかりました」と言ったので振り上げた手を下ろした。

「聞かせてくださいよ。ちょっとはおもしろい話してくださいよ」

「ぼくには落語家になった友達がいる」とチュウタ氏は言った。

「……『赤い光を見た』といって暴れる人たちのことは知っているかい？ まあ知らないとしてもそういう人たちがいるんだ。だいたい十年ほど前からそう供述する人たちが現れた。彼らには『赤い光』

以外にも共通点がある。だいたいが男性だということ、歳は三十前後であること。そして、あるものを所有していること。そいつがなにだかわかるかい？」

そう言つてチュウウタ氏は組み上げた二組の双眼鏡らしきもののほうへ視線を向けた。ジツオもそれを見たが、なにかわからなかったので「いえ」と答えた。

「そいつはバーチャ……おっと、名前を出すのとはばかれる。とにかく、そいつは業界最大手の会社が製作したというのに一年持たなかったものなんだ。二十年ほど昔の話さ。どうしようもないクソゲーで会社の黒歴史、輝かしい業績を残している会社の汚点。知っている人はみんなそう思っていると考えていい。でもそれは、あくまで表向きの話なんだ。実は、そいつはいわくつきだったのさ」

チュウウタ氏は自らの話に満足して、二度うなずいた。  
ジツオは叔父さんは心の病気なんだな、と思つた。

チュウウタ氏は身振り手振りを交えて話を続けた。

「そのゲームの開発の基になつたのが、ある大国が開発した軍事演習訓練機だ。その訓練機は、スクープを覗き込むとまるでその場にいると錯覚するほどの3D映像が赤い光で表現されるというものだった。軍隊に必要なのは勇敢な兵士だ。赤い光の仮想空間。そこで訓練させれば、死の恐れさえ克服した兵士を増産できる、と軍の上層部は考えた。ところがそうはならなかった。その訓練機は死をも恐れない兵士を増産するどころか、使用した兵士のほとんどを骨抜きにした。一度使用すると寝食を忘れてゲーム。おっと訓練に没頭するようになったからだ。間違いに気づいた上層部はすぐにその訓練機を禁止したが時すでに遅し。もう体制を維持できるだけの兵士は残っていないかった。体制の崩壊、そして情報の流出つてわけさ」

「へえ、興味深い話ですね」とジツオは優しさから言った。

「まだ続きがある」とチュウウタ氏が言ったので、ジツオは嫌な気持ちになつた。

「崩壊直前の情報資料に『訓練機に没頭した兵士に異変が現れた』  
というものがあつたんだ。……繋がってこないかい？」

「赤い光を見たという犯罪者ですか？」

ジツオは自分の叔父さんが取り憑かれている妄想の内容が理解で  
きてきたと思つて、少し安心した。

「そう。一連の犯人はおそらく中毒症状が進行して、精神に異常を  
きたしていると考えられる」

「でもそれだとニンテ……」

「よせ！ 死にたいのか！ その名前は使つな！」とチュウタ氏は  
すごい剣幕で怒鳴つた。

ジツオは妄想にどつぷりつきつた叔父さんを見て、やっぱり  
安心できないなと思つた。

「ああ、すみません。では例の組織はどうやってその情報を？」

「当時世界中のほとんどのシェアを持つていたからね。金なら払え  
たはずさ。いざとなれば髭の土管工、という手もある」

「なるほど」

## レッツ・ゴー・クレイジー！

二

ジツオは気づいた。この荒唐無稽さはまるで夢のようではないか！ 本当に夢なのだ。夢を見ている最中にこれは夢だと認識するのは難しいという。いま初めて夢の認識ができた。とにかく夢ならばいずれ覚める。叔父さんの茶番に付き合っただけで退屈のぎをすればいい、とジツオは結論づけた。

「なぜ叔父さんはそこまで知ってるんですか？」

「それは言えない。時期が来たら話す。でもいま話したことは真実なんだ、落語家になった友達に誓う。これでどうだい？」

「信じます」

「ありがと。とにかく、ぼくは考えたんだ。ここまでわかっていて、行動に移せるのはほくだけだ。正義を貫くべきだ。訓練機をこの世から一つ残らず消しさらなければならぬ、とね」

「え、行動って？ 社会に訓練機という麻薬が蔓延していて、それを一掃したいというのはわかります。しかし重要なのは訓練機を供給する組織を見つけ出すことでは？」

「われわれは訓練機をプレイすることにより黒幕に近づいていく」

「それで黒幕に近づけると？」

「論より証拠、実際にしてみればわかる」

「でもそれだとぼくからも中毒になってしまうのでは？」

「それは大丈夫。ぼくらのゲームは毒抜きをしているからね。安心は保証する」

それを聞いたジツオは、毒抜きって……あつ、まあ夢だからどうでもいいんだ、と思った。

「どんな内容のゲ……訓練をするんですか？」

「もういいよ、もうゲームで構わないよ、実際ゲームだし。それで訓練内容は毎回変わるが、今回は飛行訓練シミュレーションだ。コ

ツクピット視点のシューティングと考えていい」

「操作は一般的なゲームとほとんど同じと思っただけいいんですか？」

左手の十字キーで動かして右手のAとBボタンが攻撃とか」

「ボタンは飾りだ。コントローラーを握って、ただ念じればいい」

「それってすごくないですか？」

「訓練機はすごいんだ。訓練機の秘密はまだある。いまのきみには必要ないし、混乱させるだけだと思っただけから時期が来るまで話せないけど……。とにかくゲームを始めよう」

ジツオとチュウタ氏はそれぞれ訓練機の前に座った。しかし訓練機の構造的に使いやすいポジションというのが難しい。寝ても座ってもどんな体勢でもスコープを安定して覗き込むことはできない。

「スイッチを入れれば解決さ」

ジツオは訓練機を手を持って、動きそうなとつかかりを適当に動かしてみたが反応がない。そもそも電源がないのに点くわけない。

「うっひょー、とかあわわわ……って全力で奇声をあげてテンションを高めたあと、レッツ・ゴー・クレイジー」といい発音で叫ぶとゲームのスイッチが入るんだ」

「本気ですか？」

「習うより慣れるってね。見本を見せるよ。あわわ、うほほ、あいへーとうおー、うおー、うおー！ レッゴークレイジー！」とチュウタ氏はあわわ部分で手を口に当てたり離したりし、うほほで胸を両手で交互に叩き、戦争を憎んでから屈んで身を縮めたあと、レッツ・ゴー……のゴーの部分で飛び上がるという振りつきで叫んだ。

すると訓練機は変形を始め、膨張、チュウタ氏を飲み込み、大きくて赤い卵型の箱になった。

（捨てるんだ……いろんなものを捨てるんだ……）とチュウタ氏はジツオにテレパシーで伝えた。

ジツオは夢とはいえ恥ずかしいなと思ったが、「はあああ！」と唸ってテンションを高め、「レッツ・ゴー・クレイジー！」と叫んだ。すると膨張しはじめた訓練機に包まれ、気づくと赤い光で溢れ

るコックピット内の操縦席に座っていた。適度な堅さのいい感じの座り心地だとジツオは思った。

(いい発音ではなかったが、伝わるものがあつた。大事なのは気持ちだよ)と機内のスピーカーが何かからチユウタ氏の声が聞こえた。

ジツオはコックピット内を見回したが、目の前にコントローラーと台、壁の計器類はボタン二つ以外ダミーで赤く発光しているだけ、という具合だつた。

壁にあるふたつのボタンのうち、右のボタンを押すとスコープが現れ、ジツオの顔にちょうどいいポジション、圧力で引っ付いてきた。剥がそうとしても無理だつたので動揺したが、手探りでボタンをもう一度押すと、スコープが顔から離れた。

次に左のボタンを押すと(レッツ・ゴー・クレイジー!)と高いテンションで叫ぶジツオ自身の声が聞こえた。

(心が弱つたとき、それを聞いて自分を鼓舞するんだ。きみもそのボタンを連打することになるだろう)

「ゲームはどうすれば始まるんですか？」とジツオと尝试してみた。

(コントローラーを握り、スコープあてがいボタンを押す。そしてゲームがしたいです、と念じるんだ。そうすれば始まる)

ジツオはその通りにやってみた。

## ボタンを連打しろ！

### 三

ゲームが起動し、赤い線が画面中を暴れまわったあと、ゆっくり治まって映像を形作った。黒い背景に赤い線の殺伐とした世界をジツオの戦闘機は飛んでいた。画面に（アー・ユー・レディ？）、それから（ゴー！）と浮かび、消えた。

ジツオは言われた通り、コントローラーを握っている念じてみた。加速、旋回、上昇、下降、ミサイル、機銃。赤い線の戦闘機は思った通りの動作をした。

ふとジツオはコントローラーはほんとに飾りかな、なんて思ってしまったので右手の右ボタンを押してしまい、ゲーム機本体のスコップが顔から離れてしまった。もう一度同じボタンを押すとスコップが顔面にあてがってきた。おそらく壁の計器類の横に付いていたボタンの機能があるらしい。ジツオは左のボタンだけは押しまいと誓った。

ゲームに意識を戻すと、突然左から戦闘機が現れ、回転しながらジツオの戦闘機を追い抜き、右に急旋回して画面から消えた。

（どうだい、すごいだろ？ 山も木も街並みもまるで本物だ！）とスピーカーからチュウタ氏の声がした。

ジツオはあつ、あの赤い線は山や木や街並みなんだ、どう見ても赤い線の出来損ないだけだな、やっぱり叔父さんには普通の人と違う世界が見えているんだな、いや、夢だから叔父さんがおかしいのも無理はない、と思った。それから、現実で叔父さんにつらく当たってしまいそうだから注意しないと、と心がけた。

「それで何をすればいいんですか？ なにか目標物を破壊するとか、敵を一定数倒すとか」

（そうだね、……そうだ！ タワーを破壊するとか！）

「え？ 思いつきではないですよね？」

（ではないよ。あれは人をたぶらかすものとも言える。いい操作の練習になるよ）

「なるほど赤い光中毒の原因ってことですか？　じゃあその目標物はどこに？」

（背の高いタワーだから！　まっすぐ飛んでればわかるよ。敵も来るし。ぼくは適当に関係ないとこ飛んで暇潰してる、じゃあね）と聞こえたあと、おそらくチュウタ氏の戦闘機が急旋回して画面を横切っていった。

言われたとおりまっすぐ飛んでいくと、赤い光の比率が高まってきた、なんだか明るいほうに進んでいつてるんだろうと思った。おそらく高層ビルと思われるものもたくさんある。

すると向こう側から戦闘機が二機飛んできて、巧みな動きで一機がジツオの後ろに回り、やや後方についてきて機銃を撃ってきた。

ジツオは振り切ろうと急旋回や急上昇を試したが、まったく無駄のない動きでついて来る。じわじわと機体のダメージが蓄積していく。ジツオはやられる前に目標物を攻撃しようと考えた。

明るいほうへ向かい続けると、背の高いタワーを発見したが、さらに背の高いタワーが少し遠くにあるのに気づいた。

「タワーふたつありますよ！　どっちを攻撃すれば？」

（近くのほうね！　遠くのほうはいいから！）とチュウタ氏の声が聞こえた。

ジツオはミサイルいけ！　と念じ、ミサイルは近くの低いほうのタワーへ向かっていった。併走していた敵機はミサイルに追越し機銃を撃って撃ち落そうとしたが、ミサイルはタワーを直撃、赤いエフェクトが出たあとタワーは消えた。

（Uターンしろ！　早く！）とチュウタ氏。

ジツオは言われた通りUターンして戻ろうとしたが、敵機が追走、攻撃をしかけてきた。あっけなくやられたジツオは夢中でボタンを押しした。墜落していく機内のなか、レッツ・ゴー・クレイジー……という叫びがこだました。機体の先端が地面に突き刺さり、スコ-

プ内の画面に（ゲーム・オーバー）と赤い文字が浮かんだ。

## 地図と水中眼鏡

### 四

そしてそのあと、リプレイと称して自分の放ったミサイルがタワーに当たったところ、それから自分の戦闘機がぼこぼこにやられるところの映像が流れた。

それから（再戦しますか？）と表示され、ジツオはもちろんやる！と念じた。

ジツオは再戦、敗北、鼓舞ボタンの連打、リプレイ、また再戦……と繰り返したが、チュウタ氏はそのあいだいつもどこかに行ってまったく加勢してくれなかった。

ジツオは負け続けた怒りと悲しみで、なにがなんだかわからなくなり、ついに気を失った。

気づくとジツオは自分の部屋のまんなかで仰向けに倒れていた。ものすごくほっとしたジツオは「あー、なんだか変な夢を見ていたな」と独り言をつぶやいてみた。

「そうなの？　どんな夢？」

チュウタ氏だった。閉じられたトランクが傍らにある。ジツオは叔父さんとは関わりたくないな、加勢もしてくれないし、むかつくだけだと思いつつ、電波は夢だけ！と自分に言い聞かせた。

「んー、あれ？　どんなだったかな、なんか変な夢を見たつてのは憶えているんですけど、内容は全然思い出せません」

「わかるよ、そういうことってある」

「叔父さん、ぼくって寝てました？　なんか寝たときの記憶がちよつと」

「……ジツオくんゲームしててさ、突然ころつと寝ちゃったんだよね。たぶん疲れてたんだらう、学校も久しぶりだったらうし」

「ゲームしましたっけ？」

「そう？　してなかったかも。また今度やろう、叔父さんの家でさ。ぼくは近所に引越してきたから今日挨拶に来たんだ」

「そうだったんですか」

「いつでも遊びに来なよ。明日の放課後だっていい」

「いいですね、遊びに行きます」

「うん、でもきみ家知らないだろ？　教えるよ」といってチュウタ氏は紙を取り出してさらさらっと地図を書いてジツオに渡した。

「そろそろぼくは帰るよ、じゃあね」

「あ、はい。じゃあ、さようなら」

チュウタ氏はトランクを持って部屋を出て行った。

ジツオはぼく、としながら部屋の外から聞こえる声を聞いていた。……兄さん、ぼくは帰るよ。

えっ？　ああそうだった。チュウタ、もう帰るのか？　ゆっくりしてあげばいいのに。

じゅうぶんゆっくりさせてもらったよ。タカコさん、長居してすみませんでした。

いえ、お構いもできませんで。

いえそんなことは。

またいらしてください。

そういう社交辞令が済んでしばらくすると、ドアを開け閉めする音がした。チュウタ氏は帰っていった。

……変だわ、わたし。チュウタさんがいるのすっかり忘れてた。

おまえもか！　おれもだ。あつ、ジツオはどうしてる？　部屋で寝てるのか？

「ジツオ、寝てるの？」と言ってジツオの母はジツオの部屋のドアを開けた。

「寝てるよ」とジツオは答えた。するとジツオの母がジツオの顔をじっと見ているので、ジツオは「え？　なに？」と若干不機嫌そうに言った。

「あなた、水中眼鏡でも着けてたの？　目の周りに跡がついてるわ



## ジツオ、ノイローゼ

### 五

「ジツオ、どうしたんだ？ おまえ今日なんかやつれてね？」とシユタインはジツオに言った。

それというのも今日のジツオは変だった。なんだか話しかけても上の空で、顔色も悪く、何かにつけて失敗ばかりだった。

国語の時間で朗読を言い渡されたときも、消え入りそうな声でぼそぼそとつぶやくばかりで、教室中を暗く重苦しい雰囲気にしてしまった。

二年生のころ「ジツオくんは大きな声ではっきり読むから、その元気がいいね」と当時担任の美人の先生に言われてからというもの、朗読の元気さにかけては譲れないと思っているジツオが、である。

そのことを知っているシユタインやイーコからすれば、ことの重大さがはつきりとわかった。

「わかった！ 振られたんでしょ？ だって二組に条里リナ（ジヨウリリナ）さんっていう美人の転校生が来たもの。ねえ、どこからその情報を仕入れたのよ、ジツオ」とイーコが言った。

「イーコ、なんでそう思うんだよ。いい加減なこと言つなよ」とシユタインが言った。

「だって、ジツオ昨日の朝、食パンくわえて学校きたんだよ？ バカ思考回路のジツオなら転校生と話すためにそういうことするんだって！」

「確かに……ジツオならやりかねない。ジツオ、そうなのか？」とシユタインはジツオに聞いてみたが、ジツオはただ一点を空しく見ているだけなので、シユタインは「ジツオ、ジツオ」と呼びかけながらジツオを揺さぶった。

「おお、やめてくれ！ 墜落する！」そう言ってジツオは机を連打した。

「しないよ！ 大丈夫だから。落ち着けジツオ！」

「おう、わかった。確かに言うとおりで、墜落しない、墜落しない

……」

「なにがあつたんだ？」

「……大したことはない。わかった、話す。ちょっと来てくれ」と言つてジツオは椅子から立ち上がった。

「休み時間あと五分しかないよ」とイーコ。

「だつたらいいよ、シユタインは？」

「おう、いくよ。ぬるい授業よりおもしろそうだ」

二人は教室の外に向かつて歩き出した。

イーコは教室を出て行くこうとする二人の背中を見て、「わかった、わたしもいく」と言つてついていった。

ジツオたちは人目を避けながら体育館の裏へ行き、ジツオは昨日体験したことの顛末を話し始めた。初めて会った叔父さん、叔父さん持参のゲームの秘密……ときたところでチャイムが鳴り、鳴り終わつてからゲーム内容の説明、負け続けてうんざりした、叔父さんは電波でしかも加勢もしてくれなかった、と愚痴つた。

調子が出てきたようで、細かいところまで説明し「わかるだろ？

おれの手には負えない面倒なことに巻き込まれたんだ。狂った叔父さんと狂ったゲームをして狂った人を助けないといけない。叔父さんは地図まで書いてつたよ。こっちから行かなければあつちから来るんだろうね。どうすればいいやら。お先真つ暗だよ。でも持つべきものは友達だな。ありがとう、話したら気が楽になった。やつてみるよ、それしかない！」と言つて終わった。

シユタインとイーコは黙って聞いていた。話が終わるとシユタインは「おれに手伝えることはないのか？」と言つた。

「ない、これはおれの問題だから。さあ教室に戻ろう。おれが居眠りして起きなかったから遅れたとか言えばいい」

そう言つとジツオは教室に向かつて歩き出した。前だけを見て、

後ろを振り返らず。

「どう思う？」とイーコはシュタインに聞いた。

「うん、変だったけど、なんでもいいじゃん。元気出たみたいだし」「でもおかしいよ。最初は笑いを堪えるの大変だったんだけどさ、途中からほんとに怖くなつてきちゃった、どうしたんだろっ？」「とイーコは本心から心配して言った。

「どちらにせよ、おれはあいつの友達だからな……あいつのためになることを考えよう。それにあいつならきつと大丈夫。さあ、行く」

次の日、ジツオは昨日よりやつれた顔で学校に来た。それなのにハイテンションでいつもよりよく喋ったし、よく笑った。たわいもないことがおもしろいらしいのだ。その次の日も来たが、今度は気分が優れないようで午後には早退した。

そのあと、シュタインはイーコが一人のときを見計らって「話したいことがあるんだ、放課後の教室で、二人で話そう」と伝えた。放課後、それぞれ一度帰ったふりをしてから教室に戻ってきた。

「用って、なに……」とイーコは緊張した面持ちで言った。

「おう、おまえに伝えたいことがあって」「なによ」

シュタインは「うん、ちょっと待って」ともじもじしながら言った。

「はつきり言って！」

「うん、これ見てくれ」と言って取り出したスマートフォンをちゃちゃっといじって、画面をイーコに見せた。

「ん？ なにこれ」

「東部タワーの写真」

「東部タワーはいま関係ないでしょー！」

「なんでだよ、ちょっと見てみるよ」

イーコはしぶしぶ画面を見た。タワーが割れ、上部が地面に叩きつけられているところだった。

「東部タワーが崩れてるところね、これがなに？」

「これがなにじゃないだろ。東部タワーが割れたんだぞ」

「CGが合成かなんかでしょ」

シユタインは「そう思う？ とにかくこれすごいぜ」と言って写真の説明を始めた。

「光の加減も色の加減も不自然なところがない。細かな破片も全部そっだ」

シユタインと並んで写真を注意深く見ると、そんな気がしてきたので「うーん、言われるとそうかも」とイーコは言った。

「崩れ方を見ると特撮でもない。CGだとしても、こんなのハリウッドくらいしか作れないと思う」

「お金かけたんだね」

「いや」とシユタイン。

「これネットで出回ってる写真なんだ。写真撮ったとかで」

「え？ 東部タワー崩れたなんて聞いてないんだけど。嘘ついてるんじゃない。ほら、ネットって嘘も多いっていうじゃない」

「確かに東部タワーは崩れていない。でも、東部タワーが崩れたって話、どこかで聞いたことない？」

「ない」

「ジツオのゲーム話聞いてなかったな」

「うん、わたし途中から（ジツオのことが）怖くてちゃんと聞いてなかった」

「背の高いタワーが二つ、その低いほう、人をたぶらかす……って言った。クラウドタワーと東部タワー、低いほうは東部タワー。

電波塔はテレビを通じて多くの人に影響を与えるから、人をたぶらかす。ほらぴったり」

「はあ？ なに言ってるの」

「例えばジツオの言う訓練機のプレイヤーがたくさんいて、現実を

模したフィールドのなかで繋がっている ネットゲームみたいに

と考えるとこの写真が撮れたプレイヤーがいてもふしぎじゃない。ジツオには赤い線に見えても叔父さんには本物に見える、これは習熟度の差」

「だからなに？」

「だからジツオは本当にゲームに巻き込まれているのかも。ここ二三日顔色も良くないし、今日の早退もそのせいだろ、たぶん」

「よくわからないけど、そうだとしてわたしたちになにができるのよ？」

「おれもゲームに参加する」

それにやっとな借りが返せるんだ。いや、借りとか関係ない。おれはあいつの力になりたい、とシユタインは決意した。

六

シュタインは生まれたときから頭のいい子どもだった。母親が分娩室に運ばれてから短い時間で生まれてきて、自分の意思で泣いたり泣き止んだりすることができた。表情や行動から人の心を推測でき、両親に不要な心配を与えることはしなかった。

一度を除いて夜泣きもしなかった。その一度の理由は、真夜中なのに外から人の足音、それから窓をこつこつ叩く音が聞こえ出したからである。大声で泣くと急いで逃げる人の足音がしてシュタインは安心したのだが、両親が起き出しておむつのチェックや、抱きかかえられて揺らされたりでうんざりしてしまった。

翌日シュタインの母が割れているガラス窓を発見、事件が発覚した。両親は赤ちゃんが泥棒の侵入を防いだんだ、と口では言い合っていたが、本当は赤ん坊が物音に驚き、起きて泣いただけだ、と思っていた。常識で起こらないことは決して起こらない、すべては然るべき原因がある、と両親は考えていた。

シュタインが赤ん坊にしては高度なことをしても、両親はちょうどいい理由を思いついてなにも疑問を抱かなかった。例えば論語を読んでも、紙をめくるのが楽しいだけだと思ってくれた。

それはシュタインにとって幸運なことだった。テレビやラジオで言葉を聞いて覚え、新聞やチラシ、商品の写真と名前が書いてあるので重宝した。活字が書いてあるすべてのものを見て文字を覚えていった。

毎日が学びの時間で、とても充実していた。ときどき夜中に目を覚ますと、これから太陽が昇って新しいことが始まるというイメージに喜びをかみ締め、幸せな気持ちになったものだった。

幼稚園に通うようになってから、自分が普通ではないと気づいた。シュタインは言葉も行動も思考もなにもかもが他の幼稚園児とは違

い、同い年や一つ二つ年上の子どもにいつも翻弄されてばかりだった。

特に日源実男は思いつきで絵の具をばら撒いたり、砂場の泥遊びが泥球を投げあう泥合戦になったりで、めちゃくちゃなことばかりして保育士たちを困らせていた。

とにかく園児たちにはシュタインの異常性は理解できなかったが、保育士たちは違った。

「語彙が豊富で、話しぶりも落ち着いていますね、こんな子どもは初めてみます。この前論語を引用して泣いて暴れる園児を諭そうとしてましたよ。子、曰く……って。内容も理解しているみたいで」

「なんででしょう、英才教育かしら」

「親御さんからの日誌の連絡を見ると、そんなことは書かれていないんです。それにそれだけじゃないんですよ、説明が難しいですけど。一事が万事そんな調子なんです」

「天才かもしれませんね」

「どうすればいいんでしょう」

話し合った結果、まずは保護者に伝えようということになり、担任の保育士が通園連絡日誌にその旨を書いた。

ところが、まず読むのはシュタインである。帰りのバスを降りてからの帰り道、通園バッグから日誌を取り出して読むのがシュタインの習慣になっていた。いつものごとくシュウタくんは手のかからない賢い良い子です、とか書いてあるのだろうと思いついていた。晴天の霹靂といった具合だった。シュタインは今までに得た情報から天才だと持ち上げられた人々は不幸になる確率が高いと知っていた。シュタインは早急に自分が普通であるとアピールしなければならぬ、と決意した。

今までさんざん他の園児たちに振り回されてきたシュタインである。特にバカな子を演じるならジツオのまね！ ジツオのように思いつきで好きな行動をして、その演技を毎日貫いた。次第にシュタインが特別だという疑いも晴れ、保育士たちもシュウタくんを天才

だと思い込んだことを恥じるようになり、その話題を避けるようになった。

それからというもの、人前で普通ではないことをしないようになった。一方では物事を知りたい、世界を知りたいという欲求を抑えることができず、誰もいないところで本や新聞を読んだり、大人同士が話し合っているのを盗み聞きした。なにか秘密の悪いことをしているような気がしていた、とのちのちジツオに話したことがある。

そうやってシユタインは小学校に入学、退屈すぎる授業をやり過ぎ、一人でいるときは新しい知識を求め続けた。塾のない放課後や家族行事のない休みの日は近くの図書館に通った。そして五年生になった。クラスメイトにはジツオとイーコ、それに宇下貝益也ウカガイマズナリも含まれていた。

ウカガイは不幸な少年だった。気の短い両親のもとに生まれ、少しでも失敗すると烈火のごとく叱られ、罰で狭いところに閉じ込められ、食事を抜かされた。その境遇からか、人の顔をうかがうことに長けていた。そうならなければ飢えて死んでいたに違いない。

二つ下の妹も同じようなもので、二人で早く大人になって家を出て行こう、と言い合っていた。

歳をとるにつれ、両親は家を空けるようになった。食べ物がないので、すきつ腹に水道水を流し込んで耐えたこともあった。給食はご馳走で、余りはできるかぎり家に持って帰った。

そのせいか遺伝かはわからないが、五年生になっても身体は小さく、ガキ大将になることもできず、ガキ大将ニノウエフトシの機嫌を取ることで身の安全を図っていた。

そしてウカガイはシュタインと出会った。一目でシンパシーを感じた。こいつも人の顔をうかがって生きてきた、と。

しかしすぐ違いに気づいた。生き残るためではなく、性格的な問題。目立ちたくない、他人と深く関わろうとしない。で顔をうかがうだけ、恵まれた甘ちゃんだ！ しかも頭も切れるし背も高いし運動もできる。友達らしい友達はいないが、みんなから信頼されクラス委員にもなった。おれとは違う！

ウカガイのネガティブキャンペーンが始まった。例えば授業の難しい問題でも「アイハラシュウタくんならわかると思います！」と先生に進言し、シュタインが答えるをやたらと持ち上げた。

当時担任の先生もシュタインの底知れぬ学力に興味を持ち、数学の時間にわざとまだ習っていない項目から出題した。シュタインは授業に興味がなく、いつも頭の中で哲学的なことや、難しい計算を考えていたので、どれくらいの項目まで進んでいるのか知らず、当

然のように答えた。先生が五年の内容、六年、中一……とどんどん難しい問題にしてもすべて正解してしまった。

先生が嫉妬して話さなかったのが大人のあいだでは広まらなかったが、子どもの中で シュタインがどれくらいすごいか、子どもは誰も理解できなかったが、なんとなくすごいということでした。

『アイハラシユウタ天才説』が生まれ、クラスや学年を越えて広まった。

そして人に取り入るのがうまいウカガイは「超難しい問題を答えちゃってさ。なんかそれが普通だと思ってたらしいよ。だからあんまり人に勉強ができるって言わなかったみたい」という具合に、あいつは天才でおれら平凡なやつを見下していると暗に織りこみ、いろいろな人に伝えていった。

そうしてガキ大将フトシが、あいつをしめる！ というのを待っていた。しかしフトシからその言葉はなかなかでなかった。フトシは、他人と比べて自分にどういふ欠点があるかと、おれはケンカが強いのだろうか、とと思って満足していたのである。

それにジツオの登場である。ジツオは天才説を信じず「知ってる？ シユウタ委員長が天才って広まってるけど、それはないと思う。おれあいつの隣の家に住んでる博士に聞いたもん。それによると、あいつはある組織と関わったせいでアポなんとかって薬を飲まされて、からだか縮んだらしいんだ。それが四年前かな……だからいま小学五年生なの」と話して回った。『見た目は子ども、頭脳は大人の名探偵説』の誕生である。

ウカガイは自分の工作が茶化されていることに気づき、焦った。教室にシュタインがいないときに、いつも以上に話を盛って「アイハラに『フトシはめっちゃ強いよ、六年にも勝てるやつがいるかどうか……』って話したら、『それはない。結局ケンカにも頭は必要だよ、バカは単純な行動しかないから、いくら腕力があっても弱いんだ』ってさ」とフトシとその仲間に行った。

「それ本気かっ！」とフトシは身の乗り出して言った。

「いやけっこういつもあいつ一人でいるからさ。寂しいのかな、おれにときどき粋がつて話すんだよね。ほら、おれあいつと掃除場所が近いからさ。興味引きたいから言ってるんだとは思っけど」

「でも言っただんな？ くそっ、なめられたままでいられるか！

おれは六年どころか中坊にもケンカで勝ったことがあるのに。おれの二の腕なら誰にだって……」

「アイハラしめちやいますか？」

「放課後体育館裏に呼び出して、仲間をありっただけ集める。ありっただけでやつを囲んで、侘び入れさせるまで帰さん！」

そういう運びでフトシと仲間たち九人がシュタインを囲んだ。

過去編 炸裂！ 二の腕パンチ！

八

フトシは「わかってんだろ、天才か名探偵か知らんがイキりすぎた……おれに勝てるもんなら勝ってみろ。この二の腕でぺしゃんこにしてやる」と言った。

「は？　なんでそうなるの？　本気で意味わからないんだけど」とシユタインは答えた。特に名探偵のくだりがよくわからなかった。

「とぼけてんすよ」とウカガイはフトシに囁いた。

「そうだ！　裏は取れてんだ！　隣のじいさんから！　全部吐いたぞ！」とジツオは怒鳴った。

「ヒゲンジツオ、おまえは黙れ！　っていうかなんでおまえ来てんの？　呼んでないし、仲間でもないじゃん」とウカガイが言ったので、ジツオはしゅんとした。ありったけを集める、というフトシの命令により、人は多ければ多いほどよく、それまで誰もジツオの存在に疑問を持っていなかったのだ。

シユタインは気を取り直して「おれは二ノウエやウカガイに呼び出される筋合いはない。ヒゲンの言ってることは意味もわからない」と宣言し、帰ろうとしたのだがフトシの仲間AとBが壁になって行く手を塞いだ。

「アイハラシユウタ……覚悟を決める」とフトシは太い二の腕から生み出される力を拳に伝え、ものすごい勢いのパンチを繰り出した。が、シユタインが避けたので、壁の一人仲間Aが殴られ「フトシくん、そりゃねーよ」と言って倒れた。

「おいおい！　ちょっと待てよ。シユウタ委員長の答えまだ聞いてないじゃん」とジツオが割って入り、「ウカガイのいいぶんシユウタ委員長を殴るなんてひどくないか？　シユウタ委員長の話も聞こうぜ」と提案した。

「おめーは黙ってる！」とフトシは反発したものの、静かに考え込

んでいるまわりの仲間たち　ウカガイのいいぶんしか聞いておらず、ウカガイが嘘をついたのかもしれないという疑念が彼らにわいていた　の様子を見、「くそっ、わかった。アイハラ、なんかあったら言ってみろ」と言った。

シユタインに視線が集まり、ウカガイのいいぶん……とジツオが言ったのを聞いたシユタインは「ウカガイ、おまえがおれに用があるんじゃないか？」と言った。

「は？　おれ関係ねーし。おめーがフトシくんをなめたこと言うからだろが！」

「誰に聞いた？　おれはそういうたぐいのことは言っていない」

「とぼけんなよ！　おまえ言っただろ！」

その場にいるみんなが混乱するなか、「ふむ、これはふしぎだ。

それぞれでいいぶんが異なっておる」とジツオは話し始めた。

「これはシユウタ委員長とフトシの争いではなく、シユウタ委員長とウカガイの争いのようじゃ。つまり殴りあうのはシユウタ委員長とウカガイ、ということになる。しかし、シユウタ委員長の頭は価値がある（名探偵としてあまたの事件を解決するから）。……よし！　わしが代理としてウカガイと殴りあうということはどうじゃ？」とジツオは言った。

「いやいやいや、なんでそうなるの？」とウカガイ。

「はは！　それおもしろいじゃん。ウカガイやれよ、ヒゲンをぼこれ！」とフトシ。フトシの仲間も「やれっ、やれっ」と同じようなことを言った。

ウカガイは小柄でケンカに弱い。が、ジツオも背こそ高めなもの、ひよろひよろですごく痩せている。ウカガイのほうがまだ体重はありそうだ。というのも、ウカガイはひもじさから給食をフトシに負けず劣らず食べるので、自宅での栄養不足を補っていた。

「よし、やってやるよ」とウカガイは息巻いた。

が、ジツオは「ちょっと待て、やっぱやめた！　弱いものいじめはしたくない。フトシ！　おまえが来い！」と言った。

その自信ぶりに、実はヒゲン強いんじゃない……とその場にいる全員  
フトシでさえ が思った。

ジツオはアッパーカットを交えたシャドーボクシングを始めた。  
たしかに減量で見る影もなくやせ細ってはいたものの、例のダンナ  
はジョーをKOした……。

「わかった、ヒゲン、おれが相手してやる」と冷静を装ってフトシ  
は言った。

「フトシくん、気をつけて。なにをしでかすかわかんないよ」と仲  
間Bが言った。

二人をフトシの仲間が丸く囲み「やつちまえ」「楽勝楽勝」「あ  
なたの二の腕見てみたい、あつ、それ」と仲間B、C、Dが囃し立  
てた。

二の腕を酷使用する二の腕パンチは右腕のみ一日に三回まで、あと  
二発、いきなりは使えない、とフトシは考えた。いや……。

「ヒゲンを捕まえる！一発で仕留める！」とフトシは言った。

囲んでいた仲間のうち、ジツオのそばにいた仲間EとFの二人が  
ジツオを羽交い絞めにした。そしてフトシは二の腕パンチを繰り返  
し、放った。が、ジツオは痩せていたのが幸いし、仲間EとF二人  
の腕からすると抜けてフトシのパンチはまた仲間に当たった。

仲間Fは「フトシ、くん」と言って倒れた。

「フトシくん！」と怒鳴ったのはフトシの仲間Bだった。

「そりゃねーよ、おれらフトシくんについてきているのに、仲間ばっ  
かり二の腕パンチ見舞って。早くヒゲンをやつちまってくれよ！」

ジツオはふらふらとフトシの前に出て行き、へへへ……と笑った。  
得体の知れないジツオに、仲間からの突き上げ 頭が真っ白に  
なったフトシは、やぶれかぶれで最後の二の腕パンチを放った。す  
るとジツオに直撃、三メートルくらいの距離を吹っ飛んでいった。

九

「どうだ！ やったぞ」とフトシははしゃぎ、「ふおー、当たった！ こんなもんよ、おれの二の腕にかかれば。みたみた？ すっげー吹っ飛んだぜ、へへ」と言った。

しかしこれが良くなかった。あまりのはしゃぎように、仲間Bが「フトシくん、あんたださいよ。ヒゲン大したことなかったじゃん。それともあんたには強敵だったか？」と幻滅して言った。仲間からネガティブなことを言われたことのないフトシは萎縮して静かになった。

仲間Bは「新しいアタマを決める！ おれが立候補する、文句あるか？」と強い口調で言った。

「ある！」

仲間C、D、EがBに飛び掛った。フトシも我に返り、収めようと乱闘に加わったが、二の腕パンチが使えないのでどうにも決着がつかない。復活した仲間A、Fも参戦し、いよいよ泥沼の争いになった。

しばらくするとジツオも起き上がって、状況を把握するとやたらとハイテンションになって、「おまえも行け！」とウカガイを乱戦のなかへ突き飛ばした。ウカガイも修羅場に放り込まれて必死になっているのか、なかなか頑張って殴りあうのだった。

シュタインはあまりの展開に呆然とし、殴りあうクラスメイトたちを眺めていた。

「おれも行くぜ！」とジツオが興奮を抑えられない風に叫んだ。それから振り向いてシュタインを見、「シュウタ委員、おまえも来いよ！」と言った。

「えっ？」

シュタインのとまどいをよそに、ジツオは大笑いしながら戦いの

渦中に飛び込んでいった。

『シユウタ委員、おまえも来いよ!』この言葉がシユタインの頭のなかを駆け巡った。心のどこかにあった、今まで消すことのできなかった不安や苛立ち、やり切れなさが溶けていくと感じた。

『行くよ、ちゃんと待ってるよ』シユタインも乱戦に飛び込んでいった。

結局フトシが乱戦を勝ち抜いたが、最後には疲れて果てて倒れた。春のいい日和で空は真っ青、いい感じの風が吹いていた。みんなハイになっていて、けらけら笑っていた。

「アイハラ、ごめん。おれ、嫌なことばっかで、おまえにも嫌な目に合わせたかったんだ。他人がづらい目にあっても、おれのほうがづらい、だからおれは他人をひどい目に合わせていいと思ってたんだ。最悪だった」とウカガイが言った。

「うん、いいんだ。もう過ぎたことさ。おれだってみんなと関わりたくなくて、いつも壁を作っていた。ありもしない壁を勝手に……いま思うとそうだった。そんなこと、いつまでも続けられるわけないの」

ぼろぼろで倒れていると、だいたいのことはどうでもいいと思えるもんだ、とシユタインはのちに語る。

「シユタイン、偉いぞ」とジツオは言った。

「アインシユタインのもじりだな、完全な名前負けだ」

「おまえなら負けないさ」

ウカガイは両親の児童虐待を訴え、妹ともども児童養護施設に移るようになった。

ウカガイは「どうせ今のままでは近いうちに駄目になっていたと思う。ホームでも頑張ってみる。これからは怖い人の顔色を窺うんじゃないくて、困った人を助けるために話を伺うことにするよ」とい

う言葉を残して、去っていった。

ほかにもいろいろな事件にジツオは関与したが、クラス内ではわだかまりなく、みんな楽しく五年生の期間をすごした。

そして六年生になってまもなく、『赤い光とそれにまつわる謎』に巻き込まれたのである。

「ゲームに参戦する」と宣言したシュタインは、この隠された謎の事件を解決に導くことができるのだろうか？

## ハンカチは清潔に

### 十

まずシュタインとイーコは帰り道、ジツオの家を訪ねることにした。シュタインはジツオの家にも何度も訪れたことがあって、道順もわかるしジツオの母もシュタインの顔がわかる。

道中イーコはさんざんシュタインをなじった。

「きつとジツオはただの風邪かなんかよ。明日はほつといても学校来るわ、心配損ね！」

「風邪だったらそれでいいじゃん。ゲームで病気になったり中毒になるよりましだ。とにかくジツオの叔父さんに会ってゲームを見てみないと」

「ゲームゲームって頭大丈夫？ 変なんじゃない？ やっぱり頭のいい人が考えることって変わってるものなの？」

「やけに突っかかるな。おまえのほうか今日は変だよ」

「あらそう？ わたしは普通よ。平凡な女の子ですよ」

シュタインはうんざりしたが、怒りながらもついて来るのはやっぱりジツオが心配だからだな、と思った。

「悪かったよ、でもジツオの見舞いに行くくらい悪くないだろ」

「それはそうだけど……」

イーコは告白されるかも、と胸をときめかせていた自分が情けなかったのだった。別にありっちゃありってレベルだから悲しくもないんだけど、気持ちを弄ばれたみたいでむかつく！ と思っていた。

「ほらあそこ、ジツオの家」と言って、シュタインは一軒家の敷地内に入っていった。

それからインターフォンを押して「こんにちは！ ジツオくんの友達のアイハラです。お見舞いに来ました」と大きな声で言った。

しばらくしてジツオの母が「はいはいはい……」と言いながらド

アを開けた。

「こんにちは、アイハラくん。あら、今日はかわいい子も来てるわね」

「え！ かわいいだなんて、ありがとうございます。わたし、ジツオくんの同級生のヨシダヨシコです」

「あらそう、わたしもこんなかわいい娘が欲しかったわ」

「いえいえ、もったいないお言葉です。ジツオくんのお母さんもお若くて……」

「ところでジツオくんの具合はどうですか？ 今日早退しましたけど」とシユタインはお世辞の言い合いが長引きそうだったので、イーコの言葉を遮った。

「ん？ ジツオって？ ああ、あなたたちはジツオのお友達……」

「部屋で寝てます？」とシユタイン。

「いま家にはわたししかいないけど」

「そういえば最近おもしろい叔父さんが近くに引越してきたってジツオ言っていましたよ。その叔父さんの家ですか？」

「叔父さん？ なんのことか……」

「ああすみません。ジツオくんがぼくを担いだのかな？ とにかく今日はお見舞いで来たんですけど、ちょっとジツオくんから受け取らないといけないものがあるんですよ。長居はしないので、ジツオくんの部屋に入れませんか？ お母様に持ってこさせるわけにはいきませんから」

「ええ、それなら仕方ないわね。どうぞ。ランドセルはお好きなところに置いてね」

ジツオとイーコは部屋に上がり、ランドセルを降ろして廊下の邪魔にならないところに置いてジツオの母とともにジツオの部屋に向かった。

イーコはなぜジツオがいないのか理解できず少し心配になったが、またどうせどこかで遊び歩いているのだろうと思いなおした。

ジツオの部屋にはランドセルが置いてあったので、ジツオは一度、

帰宅しているようだ。特に散らかってもなく、ポスターなどもなく、目新しいものもなく、イーコはジツオらしくない普通の部屋だなと思った。ゲーム機が揃っているのが唯一ジツオらしいところだった。シュタインはジツオのランドセルを漁りながら「えっと、学校で必要なプリントがあったんですけど、あれ？ なんだったかな、イーコなんだっけ？ ちよつと見てくれよ」と言った。

「え、なんの話？」

「なんの話ってプリントが必要だって言ってたじゃん。とにかく見てくれよ」

しぶしぶランドセルを確認しているイーコにジツオの母の興味が引きつけられているあいだ、シュタインはジツオの大事なものをしまっている机の棚 以前ジツオが大事なものはここに入れていると教えてくれた をさつと開けて中を見た。叔父さんの家の地図があるかもしれないと考えたのだ。しかしそれらしいものはなかった。

シュタインは床に座って再びジツオのランドセルを覗き「すみません、そのプリントが必要だって副担任の先生から言われていたので、もしかしたらジツオくんがすでに担任の先生に提出しているのかもしれない」と言った。

シュタインは顔に汗を浮かべ困った様子だった。立ち上がったうつむきながら少し歩き、汗を拭こうとハンカチを取り出すと、勢いあまって飛んでいってごみ箱のなかに入ってしまった。

「ださっ」とイーコはつぶやいた。

シュタインはあわててごみ箱からハンカチをもぎ取ってポケットに突っ込み、「すみません、帰ります。お騒がせしてすみませんでした」とジツオの母に言った。

「あらそう？ お茶でも淹れようと思ったのに」と少し意地悪そうにいった。

「ヨシコちゃんは？」

「じゃあわたしも帰ります」

「今度来たときはお茶飲んでいってよ」

「はい、楽しみにしています」

そうして二人はそそくさとヒゲン家を後にした。

「ぷぷっ！ シュタインでも失敗することあるんだね！ めっちゃきよどつてたじゃん、ぷぷっ！」とイーコは大喜びで言った。

「それはおれだって失敗することはある。でも、今回は成功したほうだぜ」

そういうとポケットからハンカチを取り出し、ハンカチで包んでいた紙を広げた。

「叔父さんの家、ほんとにここから近いじゃん。なんか無駄に頑張った気分」

それからハンカチをはたきながら「ごみ箱に落としたからあんまり清潔とは言えないね」と言った。

イーコはそれを聞いてうんざりした。

「たしかになかなかうまい小芝居だったかもね。でもごみ箱に地図があるって気づいたなら、おばさんがお茶でも淹れてるあいだに拾えばよかっただけじゃない。シュタイン、あんたバカね」

## 特技はゲームのチュウタ氏

### 十一

時は少し遡り、ジツオがゲームのことをシユタインとイーコに打ち明けたあとのこと。

学校から帰宅したジツオはチュウタ氏の地図を確認、あまりにわかりやすい場所だったので憂さ晴らしを兼ねて地図をこみ箱に放り込み、チュウタ氏のもとに向かった。

登下校でときどき通る道に面していて、ものすごく質素で寂びれているアパート 生徒のあいだで廃墟説が広まっていた の一室がチュウタ氏の部屋だった。

ジツオが訪ねるとチュウタ氏は在宅していて、部屋に招きいれてくれた。擦り切れた畳の部屋と、手前に小さな水場があるだけで、外見に違わぬ質素な中身だった。

「悪いことはなにもないんだ。家具がないから部屋も狭いと思わないし」とジツオがなにか言う前にチュウタ氏は言った。

たしかに小さなテーブル以外なにもなかった。その上に急須や湯のみやちよつとしたお菓子が置いてあるだけ。

「こんなになにもないと退屈じゃないんですか？」

「大丈夫。ぼくには訓練機があるし、夜は警備員の仕事、そのあとは寝るだけさ。お茶でも飲むかい？」

「いえ」

「訓練機するかい？」

「…… しかないですよ、そのために来たんですから」

ジツオは負け続けたことに腹を立てていて、今日こそは勝ってみせると思っていた。

「わかった、やる気あるじゃないか」と言ってチュウタ氏は押入れからあのトランクを引っ張りだしてきた。

しばらくすると世界が一変！ 真っ白な空間が広がった。

「やっぱり夢じゃなかった……」とジツオはつぶやいた。

「こういうゲーム機だからね。ほら、このトランクの鍵を開けると次元転送装置が起動するようになってるんだ」とチュウタ氏は言っ  
て、取り外した南京錠を見せた。鍵穴がなく、どう開け閉めする  
のかわからないものだった。

「ゲームの組み立てをしないと。ジツオくんも自分のぶんを」

二人は、三脚の上に双眼鏡を取り付けて「レッツ・ゴー・クレイ  
ジー！」と叫んだ。

コックピットに座っていたジツオは驚いた！ 昨日はゴーグルや  
無意味なボタン、赤い光で覆われていただけなのに、ロボットア  
メのコックピットのように外の風景が広い範囲で見渡せるようにな  
っていた。しかも赤い線だけでなく、面もあるよりわかりやすい世  
界 赤一色のポリゴン映像というのだろうか になっていた。

「叔父さん！ 昨日とずいぶん違いますよ！」

（ああ、もう第一段階はクリアしていたのか。若いつていいね、成  
長が早くて。でもまあ、やることは同じだから）

ジツオは同じなもんか、と思ったけど目の前の台にコントローラ  
ーが乗っかっているし、席の両サイドに一つずつボタンがあるのを  
見つけた。右のボタンと左のボタン……右のボタンを押すと、上か  
らゴーグルがやってきて、ジツオの顔にいい感じに引っ付いてきた。  
やはり左のボタンは押すまいと誓った。

（今日は昨日と違う訓練プログラムをするかい？ それとも昨日の  
続き？）

「じゃあ昨日の続きを」

（オーケー）とチュウタ氏が答え、しばらくすると昨日と同じ3D  
シューティングが始まった。

ジツオは周囲の光景を確認した。ゲーム中の画面も昨日とまった  
く違い、赤一色とはいえ地上の光景も精緻で、なにもかもが違った。

いつか叔父さんみたく本物そっくりに見えるようになれるのかな、  
と思った。よくない憧れだった。

それからチユウタ氏がまたどこかに行ってしまう前に「叔父さん、  
昨日はぼくほこぼこにされましたよ。見本ってやつを見せて欲しい  
ですね」と言った。

（いいよ。でも結局は死んで憶えないと駄目だから、大して参考に  
ならないと思うけど）

そうスピーカーから聞こえると、おそらくチユウタ氏の操縦する  
戦闘機がジツオを軽々と追い越していった。ジツオもフルスロット  
ルで付いていったが引き離されるばかり。明らかに機体のスピード  
が違う、強い機体使ってるんじゃないのか？ とジツオは疑った。

そして遠くに敵機の姿を確認、先行していたチユウタ氏の機体が  
交戦を開始した。しかし攻撃するのは敵機のみ。チユウタ氏の機体  
は敵機のミサイルや機銃をかくぐり、敵機の後ろを取ってしばらく  
追走、離脱という動きを繰り返した。途中で敵の仲間も参戦、チ  
ユウタ氏は二機を相手にすることになったが、まったく問題にしな  
かった。まさに自由自在、物理法則を無視しているかのような動き  
で避けまくった。

それだけではない。敵機からミサイルが放たれてチユウタ氏の機  
体に向かっていっても、着弾する手前になって微妙に軌道が逸れて  
結局は当たらないなど、操縦技術以外の要素も感じられた。

ジツオは呆気にとられて見ていたが、チユウタ氏が攻撃しないの  
がもどかしくなってきた。「叔父さん、なにやってんですか。攻撃し  
ないと」と発破をかけた。

（でも相手もいることだしね。少しは遊んであげないと）

「相手ってコンピューターでしょ？ さっさとクリアしましょうよ」  
（いやいや違うよ。ちゃんとプレイヤーがいるんだよ、言ってなか  
ったっけ？）

「言っていないですよ！ だからか、いきなり難易度高いと思ったん  
ですよ」

(これで?)というときユウタ氏はミサイル一発ずつ　ミサイルはでたらめなホーミング性能で着弾するまで追い続けた　で敵機を仕留めた。

すると(コネクト)という文字が画面に浮かび、(オールド・マウス氏、さすがですなあ)とジツオの知らない人の声が出た。

(いえいえ、そちらさんもなかなかの腕前でしたよ)とユウタ氏はもう少し善戦してみますよ、では)と相手のプレイヤーが言い終わると、画面から(コネクト)の文字が消えた。

「オールド・マウスですか」

(ぼくのアカウント名なんだ。実はきみのアカウントもあって、名前はG20。アルファベットのGに数字の2、アルファベットのOね)

「そりゃご親切にどうも。ところで叔父さんの使ってる機体って強すぎじゃないですか?」

(そう見える?　でも実は機体は一種類しかないんだな)

「でもスピードとかミサイルとか明らかに違ったじゃないですか」

(これは念じるゲームだからね、重要なのはイメージなんだ。次はジツオくんが戦ってみなよ)

「もちろんやりますよ、でもコツがあるなら先に言ってくれればよかったのに」

(じゃあぼくは違うところに行つて来る。何かあったら、ぼくと通信したいと念じれば繋がるから)

そう言つと、ユウタ氏はまたどこかへ消えていった。

## ジツオ、苦い初勝利

### 十二

ジツオは、先ほどチュウタ氏に親しげに話しかけてきたプレイヤーアカウント名はファースト・ウォール と、一対一の対戦を始めた。一番最初の負け、その後のいい加減な操作によって負け続けた苦い思い出を払拭するかのようになり、集中して戦った。

相手の戦闘機がどこにいるかよく見て、ロックオンされたら可能な限り速度を上げ、旋回や上昇、下降をした。少し不利な状況になっても腐らずに操作した。

すると撃破されるまでの時間が少し延び、もう一度戦うと、さらに少し長く戦えた。そうやって続けていると、今度はジツオが敵機をロックオンできる時間も増え、攻撃が少しずつ当たるようになっていった。

やはりチュウタ氏の言った念じるゲームという言葉が大きかった。ジツオは戦闘機が加速していくのを想像し、雲を切り裂き、音をあつさり置いていって、空気との摩擦で機体の表面温度があがっていく。イメージとゲーム内とのギャップを埋めていこうとした。

もちろん最初からうまくいったわけじゃない。あまりにかけ離れた現実と理想のギャップに苦悩し、もどかしさを感じ、ときに辞めようと思つこともあった。

たかがゲーム、それにまだ始めたばかり、辞めることは容易い。でも…… 負けたままでいられないじゃないか！

背後を取られていたジツオの戦闘機は急なブレーキと旋回によりミサイルを避け、逆に敵の背後を取った。しかし機体が急激な動作に耐え切れず、墜落して地面に突き刺さった。

(G20さすがだ…… オールドマウスが連れてきただけのことはある)とファースト・ウォールさんが言った。

「まだ勝ってないですよ、まだまだです」

言葉とは裏腹に、ジツオは自分が着実に成長していつている、ついに勝つ瞬間が近づいている！と感じていた。

そして次こそは勝てると思って再戦を申し込んだ。実際にジツオの戦闘機は鋭い動きをするようになって、攻防ともにレベルが上がっているのは明らか。ファースト・ウォールさんとはもう実力伯仲と言っている。

それなのにウォールさんは再戦をあっさり受諾した。ジツオはついに勝つときがやってきた、と思った。

ゲームが始まり、戦闘機を操縦、高速で敵機に向かっていった。捕捉するとジツオは動きを読みきって背後を取りロックオン、ミサイルを発射！ミサイルは敵機に向かって勢いよく飛んでいった。そしてジツオが勝った！と思った瞬間、敵機は急ブレーキと急旋回で回避。ジツオは敵機の動きについていけず捕捉すらできないまま、どこからかミサイルが飛んできて着弾した。

ジツオの目の前はぐらぐらと揺れ、ついには回転、墜落していった。次に見えたのは、地面に突き刺さった戦闘機からのいつもの光景だった。

ジツオは恥ずかしかった。ファースト・ウォールさん、訓練機、シューティングゲーム　生きとしいけるすべてのものに対する敬意、畏れ、感謝の気持ちを忘れていたのだ。自分が成長することだけに心を奪われ、調子に乗っていたのだ。

「ファースト・ウォールさん、すみませんでした。ぼく、勝てると思ってたんです。まだ始めたばかりだというのに……甘く見てました。ゲームもあなたも。ぼくは自分が恥ずかしいです」とジツオは静かに言った。

（偉い！己を知ることが成長の第一歩。やっぱりきみは有望だよ）  
するとジツオの視界がぱーっと開け、世界がまるで本物のように輝きだしたのだ！緑が萌え、水が流れ、優しい風が吹く美しい世界　を模倣したバーチャル世界　にいる喜びが、ジツオのなか

で溢れだした。

「もう一度、再戦してくれませんか？ この美しい世界を思い切り見てみたいのです」

（もちろん！）とウォールさんは答えた。

また対戦が始まり、ジツオは周囲の光景を楽しんだ。そしてまるでその場にいるような五・一サウンドの音響で、世界の音を聞いた。景色も音も素晴らしいものだった。ジツオは現実と寸分違わぬ世界を手に入れ、また一つ壁を破ったのだ。

（楽しんでるかい？）とウォールさんの機体が近づいてきたとき、ジツオはミサイルを連発、ついに初勝利を上げた。

それから（ちょっと、ジツオくん……）という呼びかけをシャットアウト、ジツオはチュウタ氏に繋げて「ぼく小学生ですから、そろそろゲームやめて帰らないと」と伝えた。

チュウタ氏がすぐに操作してくれたのか、二人は手早く現実に戻ってこれた。ジツオは、ちょっとすっきりした気分になっていた。散々負け続けたんだから、一回きたい勝ったってばちは当たらないよな、というか小学生相手なんだから一回くらい勝たせてくれよ、と思った。でもやっぱり悪かったな、と後悔の気持ちもあったので明日ちゃんと謝ろうと決めた。

窓の外が暗くなっていて、時間はもう午後七時を過ぎていた。暗闇が世界を覆って、朝になるまで明るさは戻ってこないのだ。

「叔父さん、もう一回ゲームに戻れませんか？ ファースト・ウォールさんに謝らないと」とジツオは言った。

チュウタ氏は事態は飲み込めなかったが、ジツオの真剣さを感じとり「わかった。帰りが遅くなるのもいけないけど、遅くなって謝る機会を逃すほうがよくないものね」と言っただけでゲームの世界へ戻してくれた。

ジツオはファースト・ウォールさんに交信「失礼なことをしてすみませんでした。あまりに勝てなかったもので、ついやってしまいました」と謝った。

(……びっくりしたよ。次やったらもう相手にしないよ)

「はい、もうしません。また明日ゲームしてくれませんか？」

(まあ、いいよ。次は実力で負かしてみなよ)

「はい！」

(こっちも負けないけどね)

「……やっぱり、せつかくゲームの世界に戻ってきたことですし、もう一度だけ対戦してくれませんか？」

(きみは明日学校があるんじゃないのかい?)

「大丈夫ですよ、一回だけですから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8129y/>

---

おれたちバーチャルボーイズ！

2012年1月2日08時49分発行